



Alien
Alien

朝 森 顯



Alien
Alien

朝 森 顯

Alien

朝森 顕



愛してるのこゝと？

姉さんが傍にいるとき、僕はいつも僕の内側に織り込まれた。

人生も空間も国籍も街も、そのすべてが僕の内側にあった。例えば、強く息をすることと同じだ。吸い終わった瞬間は、どの時間からも消えている。始まるのは吐く瞬間からだった。彼女といるとき、そんな呼吸を繰り返した。

繰り返し。繰り返しだった。

僕は息を吐いた。

冬の時間、冬の空、冬の電車の中、冬の彼女の隣り、僕より年上で、国籍が違って、同じ感覚を持っている。

そんな女性の隣りだった。

僕は彼女を『姉さん』と、呼んでいた。彼女の名前を発音することが僕には出来なかったし、そう呼ぶことが僕と彼女との距離を縮めてくれるのだと思っていた。彼女の国なんかよりも、僕はずっと傍にいた。あなたといると変な感じよ、と彼女は言っていた。

僕は日本人らしくないそうだった。僕もそう思っていた。僕は日本人が嫌いだった。苦手だったと言ってもいい。僕は誰とも折り合いをつけられなかった。

どうして、あの冬。僕らは、ああして同じ電車に乗っていたのだろう。

僕らは待ち合わせて、逃げ出すようにあの始発電車に乗った。何の予定もなくそうした。呼び出ただけだった。僕らは、コーヒーにミルクといったような溶け合った関係で、約束は時間の許す限りいつだって簡単になされた。

僕は、

「日本が嫌いだ。」

と、嘯いた。

「日本人のくせに。」

と、彼女は言った。

「最悪。」

と、彼女がつぶやいて笑った。

「そうみたいだね。」

と、僕が言った。

何の意味もなかった。持ち合わせで、どんなに電車を乗り継いだって、本当はこの国を抜け出すことは出来なかった。僕らはそれほど子供でもなかった。それが分かっている、僕らは電車で待ち合わせた。明るい水色と赤の光が電車の速度で流れていく。

姉さんは、いつも、僕の右側に座った。僕が左側をあまり視なかったからだった。僕は苦手なものは見ないようにしていた。交通事故で左眼の機能を喪失してそれ以来世界を眺めるのが苦手になった。僕の左側では、彼女が視えなかったからでもあった。

あの事故以来、彼女以外の女の子は誰も僕を視ようとしなくなった。僕が苦手みたいで、僕も彼女たちが苦手だった。皆そっと、僕の左側に隠れた。僕の左側は次第に微笑まなくなった。その分だけ姉さんを観た。

僕は十代で左眼を失くしてからは僕の人生の半分を笑わなくなった。だから、僕はいつの間にか彼女の左側にいて、彼女の左手を握っていた。彼女だけが僕を観てくれた。日本は滅んでいる、と思った。

僕はまだ、あの瞬間ただの大学生だった。何も知りしなかった。僕からほんの少し日本が遠のいていった。

そして、いつの間にか、留学生だった彼女に僕は出逢った。

僕は出逢い、そして彼女の手を握っていた。僕の右手で。溶け合う奇妙な温かさで。

彼女は、就職浪人しているうちにいつの間にか不法滞在になってしまった外国人だった。ただ、大使館に行かなかただけでそうってしまったと彼女は言っていた。そんな話をすると彼女は、どうしよう、とおどけて笑った。気にしていないみたいだった。どうでもいいんじゃないか、と僕は言った。追い出されたら、二人で国を出ようと言ってまた笑った。二人で生きようと言った。

それが、僕らの関係になった。

それはまだ、約束ではなくただの眩きに過ぎなかった。

不法滞在の彼女と国を出たい僕。

僕らは存在として奇妙に似た倦怠感を持っていた。

いつも、周りを気にしなかった。いつかは終わる、そんな感覚があった。だから、こんな朝も当然のように迎えた。僕らは、面白そうなら何でもやった。僕らには共にそれほど希望がなかったからでもあった。少なくとも僕にはそう想えた。それは何処か僕に、1999年の憂鬱を思い出させた。あの時代、誰もが、このまま世界が滅べばと想っていた。

このまま世界が滅べば、もう世界を観ずに済む。

そんな憧憬が1999年の人々の心にはあった。未来というものが抱えている無軌道な願望が、僕らを疲れさせていたことに気づきながらも、誰も、今を辞めることが出来なかった。

1999年、僕は世界の滅びを感じた。僕はその年にきつとこの左眼の空白を予感していた。その冬に僕は左眼を失くした。世界は黄昏ていた。あれが僕の観た最後の世界の光景だった。

1999年、それは姉さんが初めてこの国に来た年だった。

1999年以降の世界…僕らは確かに滅びた世界の中で生きていた。

だから、それは最初、ほとんど冗談のつもりだった。ただの思いつきでしかなかったことだった。

彼女はいつの間にか眠っていた。

深く何かを考えているようでもあった。寂しげなひび割れたガラスのような表情だった。

僕はそっと姉さんのくすり指を取り出し、指輪をはめた。僕がさっきまではめていたローマングラスの指輪だった。ローマングラスは紀元前のガラスが銀化現象を起こし宝石化したガラスで、人の手によって生まれたの天然石だった。青と紫と石の色で輝かず、煌めかず、何も吸い込まない、そんな光を持っていた。ただのガラスと宝石が溶け合った曖昧な関係が平べったくそこにあった。

それは、ただ静かにそこに在って、形だけ、色だけ、意味だけを置いた。

たぶん、彼女の国で産出されたものだった。僕はそれを本物のローマングラスだと信じていた。

それをどんなふうにも確かめることができなくても……。

指のサイズは知っていた。すべすべした指先の感触があった。指は冷たかった。彼女の左手の薬指にはそれは少しだけ大き過ぎるものだった。僕は彼女の薬指にそれをゆっくりとはめた。指先を指輪がゆっくりと滑っていた。どうしようもない深い穴に落ちていくように彼女の薬指に指輪は入っていった。

僕は彼女の細い指を握り締めた。

いつも傍にいた、

と、僕は彼女の手を握り締めながら思った。

冬の朝、たった二人だけで、こんなに澄んだ景色の中、言葉も意味も意志も想いも何もかも流れていった。彼女といるときだけ、僕には世界の時間がすべて惜しく、途轍もない速さで成長し、僕らは世界の速度に追いつくことも出来ずに老いていつているのだと感じた。

僕はいまこの瞬間死ぬ、

それが僕の実感だった。

僕にとって、それが愛で、それが消滅、ということだった。僕にとって女の子が傍にいるということはそういうことだった。僕は、僕の意味をいつも彼女にみつけた。本当は、そんなものは、有りもしないのだと、僕は簡単に吐き捨てた。彼女にそれを伝えれば傷つくのか、どうなのか、それさえも僕には分からなかった。彼女といるとき、何もしないまま時は過ぎた。僕らはそうし

て運命に従っていった。

僕の隣りで滅ぶ人は彼女だ、

そんな言葉が冗談のように頭に浮かんだとき、唐突に言葉は、

「結婚しよう。」

と言った。

彼女は静かに瞳を開けた。

自分でも何と言ったのか、うまく飲み込めない言葉だった。

彼女も最初僕が何と言ったのか、聴き取れなかったようだった。僕は、

「結婚したい。」

と、言った。結婚したい、と僕は正確に彼女に繰り返した。そのとき、彼女は、ようやく左手の薬指の指輪に気付いた。見たこともないくらい困った顔をしていた。彼女は幼い顔をしていた。眠いの？と僕は彼女に訊いた。彼女は首を振った。いつもこんなとき彼女は年下の女の子のように見えた。愛がかけ離れて、愛しさが零れ、微笑みは誠実さの中から滲んだ。少しだけ僕を眺めて、彼女は完璧にその場所に停まった。

完璧に。

僕はほんの少し、彼女の方に向かって動いた。彼女は微かに震えていた。彼女の後ろで光が不規則に乱れた。彼女の輪郭が黄金色に輝いていた。

「本気？」

と、彼女が訊いた。僕は微かに頷いた。それ以上は無理だった。少しだけ彼女を見つめられない自分に気付いていた。

彼女も少しだけ、こちらに近づいて来た。僕も少しだけ近づいた。どうすればいいのか、僕には分からなかった。アイシテル、と世界で一番どうでもいい言葉が浮かんで来た。

彼女は何を考えていたのだろうか。

無造作な濡いた薄いキスだった。

鼻先をくっつけて、彼女の熱い息が僕の鼻先に掛かった。彼女の空白の言葉が湿っていた。彼女は瞳を閉じた。アイシテルヨ、と意識がもう一度言った。誰かこいつを黙らせて欲しいと想った。彼女を観たかった。答えが訊けなかった。どうなんだろう？僕は彼女の傍にいたのだろうか？今、僕は言葉の中でたった独りになった。君を失いたくない、と意識が言った。馬鹿みたいだった、本当にどうにかして欲しかった。心が冷たくなっていくことに気付いた。そのとき、彼女が微笑んだ。眼前で彼女の涙が車窓から差し込む朝日に輝いていた。

世界がくるくると回転していた。

「結婚したい。」

と、彼女が僕の口真似をした。僕も、

「結婚したい。」

と、言った。鼻先が重なってまたすぐに、キスした。答えだった。

僕らの答えがそこにあった。

光はただ乱れ続けた。音はその場所で消えた。音なんかいらなかった。僕らには唇があった。電車は同じ街を走り続けていた。僕らにはただ、僕らだけがあった。

彼女が鼻先で話をした。彼女のたくさんの言葉が一気に僕の頭と胸の中で鳴り始めていた。どちらなのか僕には分からなかった。きっと彼女にも分からなかった。

姉さんが…一人の独りぼっちだった女の子がいま僕の中にいた。

僕の中で彼女が僕と話をしていた。

僕らは僕らを求め合っていた。

「日本が嫌いだ。」

「日本人のくせに。」

「僕だけだ。」

「私あやまらない。」

「姉さんが悪いんだ。」

「最悪。」

「そうみたいだね。」

「愛してるよ。」

「私、愛してない。日本語わからない。」

「大丈夫。」

「私が、いなくなったら、あなた、どうする？」

「僕は豊かなんだ。」

「そうみたいね。」

「信じてるよ。」

「そうね。」

「姉さん、結婚しよう。」

「そうね。私日本語わからない。」

「姉さん、結婚しよう。」

「ほんとに、愛してるの？」

そう……。

「愛してるの？愛してる？」

「ほんとだよ。」

僕は彼女に言った。

「愛してる。」

僕は言った。どうでもいい言葉だった。僕は彼女の傍にいたんだって思った。誰よりも傍に…

それが、僕に起こった最初の奇跡で、報いで、救いで、それで最後まで構わないと思えた。彼女の涙を僕は自分の涙のように感じていた。この世界に僕なんか何処にもいなくなたっていい、と想えた。

ただ、彼女がそこにいることを僕は何よりも強く感じていた。比べることも、彼女以外のどんなことを思い浮かべることも、僕には出来なかった。

アイシテルヨ

と、僕の意識が勝手に言った。僕は彼女を眺めていた。彼女にもその声が聴こえているはずだった。それは、これから、もう一人の僕になるたった一人の女性の声でもあった。

此処イテモイイ

そう彼女の瞳は答えていた。

僕はようやく彼女をみつけた。僕はこの国の重さを何処か遠い場所で感じていた。電車の揺れるこの律動が、僕らの胎動のように、僕らの運命を予感させた。

揺さぶられ続け落ち着くことも出来なかった。それでも、僕らには僕らがいた。彼女でもなく、僕でもなく、僕らがそこでいま約束になりつつある時間を過ごしていた。

僕らに必要なのは僕らの視界から見えるほんの少し先だけのささやかな未来でしかなかった。とりあえず、いまの僕らにはそれだけで十分に僕らが僕らである理由を満たすことが出来た。

僕らは次の駅で降りて、僕らの街まで引き返す。

これから、お互いにとって何でもない関係を、特別ではない時を、ありのままの、別つことさえ想えない僕らにはありふれた暮らしを僕らは予感していた。

僕らは全く確かだった。

僕らの感覚はそこにあった。僕らの予感も、僕らの未来もきっとその場所にあった。

やけに、電車は揺れていた。朝の光は、すでに役目を終えようとしていた。冬の空も輝いていた。ただ、彼女の薬指の指輪だけが、僕と彼女の影に隠れ、当然、僕は彼女の手を握り、僕らの中にそれを埋めた。アイシテルヨ、なんてどうでも良かった。アイシテナイって言っても同じだった。そのどちらも僕らには同じ言葉のように聴こえた。答えは同じだった。僕の右手と彼女の左手の隙間に、その微かな空間に、僕らの国があった。それだけが今、確かな真実だった。いま、僕らがここに存在する理由だった。

僕は彼女の指先を撫でた。

彼女は僕の指先を掴まえた。

人生も運命も極めてちっぽけなまま、ただ、僕らだけを認めていた。

end



最後まで読んでくださって、本当にありがとうございました。
はじめまして、朝森 顕です。

電子書籍という形で、本を出版しようと思ったのが一昨日。

意気込んで作業を始めたのは良いのですが、その後のファイルの形式だとか、表紙作りだとか・・・僕はとんでもない不器用なアナクロ人間なのでおそろしく手間が掛かりました・・・

文章を書いているときより、遙かに、原稿そのものを作っているときの方が難しかったです。いま、ようやくだいたい全工程が終わって後は入稿というところでこれを書いているのですが、今は深夜零時、晩御飯を食べに外に出てからずっとこもりつきりで、本当にくたくたです。でも、まあこうやって最後までなんとか読んでくださる方がいらっしゃるのなら僕もいつか、たぶん、なんとなく報われるんじゃないかなあと想ったりもします。

表紙の絵は、自分で水墨で描いてみました。

表紙も含めて、この作品を気に入って戴けたら嬉しいです。

感想やコメントなどお待ちしております。

では、最後まで読んでくださって本当にありがとうございました。

あっ、いまさっきも言いましたね。

でも、何度でも…。

読んでくださって、本当にありがとうございました。

では、また。いつか何処かで…。

朝森 顕 拝